

終結看護チームの取り組みについて～初診時43歳以上の患者との関わり～

山手志保 太田恭子 浅井麻利子 中岡義晴

医療法人三慧会 IVF なんばクリニック

【諸言】

不妊治療を繰り返す中で、「終結」という選択肢に戸惑う多くの患者に直面し、患者が抱くニーズを患者自身が見出し選択できる様な看護が必要と感じている。初診患者の中には、治療開始前に「終結」を考慮しながら治療と向き合わなければならない年齢の患者も少なくない。今回その関わりの一部を報告する。

【実践内容】

2021年1月から9月までにA施設を受診した43歳以上の初診患者47名に対し、予診票から「受診理由」「治療目安期間」と、初診から半年間の関わり及び治療状況をカルテより抽出した。倫理的配慮として、治療中に得られた情報を個人が特定できないよう匿名化し、学会発表に用いることを文書で説明し了承を得た。

【結果】

受診理由は「結婚を機に」16名、「転院」18名、「年齢への焦り」6名、「他科から紹介」5名などであった。治療目安期間は「1年以内」21名、「2年以上」2名、「無記名」16名、その他8名であった。看護師が対面での関わりを必要とした患者は31名、定期的なカンファレンス内で見守りと判断した患者は16名であった。会話内容は「高齢治療の困難さ」11名、「夫婦の治療」10名、「治療方法」7名等であり、その他3名であった。半年後の治療状況は、「治療継続」21名、「中断」16名、「終結」10名、であった。中断のうち関わり後に来院がない患者は、7名であった。

【考察】

患者背景は、挙児希望時期の遅れと、治療の長期化に分かれた。治療目安を1年以内と考えていた患者は、高齢治療の困難さを把握した上での期間なのか、治療を行えば妊娠できると期待したかは予診票から汲み取れなかった。また、対面での関わりを必要とする患者が66%であり、高齢による治療困難さや治療についての情報提供が多く、知識不足の状態で治療を選択していた患者が多いことが推測できた。現状を理解し「不妊治療を受けない」選択をしたと考えられる中断患者を終結に含めると、治療開始から半年後に治療を終結した患者は36%であり、高齢に伴う医学的知識を治療開始前に知ることが治療を選択していく上で重要であるとわかった。

【今後の課題】

高齢に伴う医学的な情報を提供した上で治療を選択した患者に対し、その先も患者自身が意志決定できるような関わりが必要と考える。今後も終結看護について深めていく。